

ART ESSAY

アート★エッセイ

人と植物のいい関係

矢野 TEA
(ガーデンデザイナー)



小学校や幼稚園が高いフェンスで囲まれ、登下校時には親が同伴しています。公園や路地でも子どもだけで遊んでいる姿が見えません。子どもは元気に外で遊ぶ、という時代は終わってしまったのでしょうか。幼児犯罪の多発など、今の社会の歪みをつくってしまった私たち大人のツケが、子どもたちに回ってしまったようです。外で遊ばずに大人になることに強く不安を感じます。

私たちが子どものころは、雲の形が何に見えるか、鳥や馬、お腹が空いている時にはアンパンに見えるなど、他愛もない遊びを楽しんでいました。学校帰りの道草や、河原や森、そして近くの公園でたくさん時間を過ごすことで、自然の大切さと怖さを教わってきました。

そんな恵まれた環境下で五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)をフルに使って遊んだのと同じ暮らしを、今の子どもたちに与えるのが難しくなったのが現状です。

それならば、微力ながら、なんとか工夫して子どもたちに自然と接する機会をつくってあげたいという思いから、庭や近所で見かけるコケや草花、家庭にあるいろいろな容器や包材など身近にあるものを材料にして家の中に、テーブルの上に、オリジナルの小さな大自然をつくるプログラム(テーブルガーデン)を、自然環境学習として各地で教えています。

いつも目の届くところに植物があり、3か月くらいその生長を見守っていると、犬や猫などのペットと同じようにかわいと思う気持ちが芽生えてきます。昨日と今日の植物の違いを観察したり、弱っていたら元気になるように手入れをしたり…。

身近にある自然を感じる事がきっかけになって、ひいては地球全体の自然環境に興味を持つようになります。そして、連鎖的に観察力や創造力も育ってきます。大切なのは、子どもたちの心の芽を摘まずに、やさしく見守ることです。

(やの ティー)



「テーブルの上で楽しむ小さな森」
(左右40cm)

特集

授業の極意

第4回

造形遊び・インスタレーションの巻

造形で遊べる大人になるために

— ひらめきと、選択と、つながりと —

造形遊びの極意は「ひらめきと、選択と、つながり」を気楽にたのしむことだろう。つくる前からアイディアスケッチや設計図があるわけではないが、たぶん漠然としたアイディアはあるだろう。たまたま気に入ったものや何かつくれそうなものを「ひらめき」や「思いつき」のままに組み合わせて「アート」にしていくたのしさと高揚感。もともと、ものづくりのたのしさって、こんな感じだったと思いながらまわりを見ると、子どもたちはそれぞれに真剣な顔でいろいろこだわってつくっている。

出来上がりに決まりのない造形作品は、作者にさえ完成予想はできないが、その時々思いや願いのようなものはある。「ここは切り取ろうか、つなげようか」「高く積み上げようか、横に広げようか」「紙をはろうか、色をぬろうか」。おおむね、このようひらめきや思いつきが自分の工作技術に見合っ出てくるようになれば、極意その1は身につけたことになるだろう。

極意その2は、選択である。「たくさんある木切れの中でどれを使うか」「絵の具の色は何色にするか」「どの筆を使おうか」。選ぶことは無限と言ってもよいほどある。こういう言い方をすれば、造形に限らず、生活の中はさまざまな選択の連続だと言えるが、「安全」とか「常識」とかの枠の中で、その選択の幅は制限されていることが多い。しかし、造形にはほとんど制限がないので選択の幅も無限である。

極意1、2を縦横に駆使して、「できた作品をどこに飾ろうか」「何というタイトルをつけようか」「次は何をつくろうか」、そういったつながりや広がり第3の極意とも言えるもので、「たのしかったなあ」と、心から感じられるようになれば免許皆伝である。

こんな造形のたのしさを忘れず、いくつになってもたのしく遊べる大人になってほしい。「造形遊び」の時間がなくなっても、たのしい思い出は心の中に深く沈み込み、やがて「インスタレーション」と呼び名を変えて、伏流水のようにわき出してほしい。

「材料の魅力」「場所」「子どもどうしのかかわり合い」を大事にして

—造形遊び：「つなげてみると」(第2学年)を通して—

東京都練馬区立小竹小学校 岩田 真

造形遊びの「授業の極意」と言えば、私は「材料の魅力」を的確に示し、「場所」を生かし、「子どもどうしのかかわり合い」を大事にすることだと考えます。以下に、その三つの要点と今回行った造形遊び「つなげてみると」の授業について述べます。

1. 材料の魅力を示す

材料の魅力をどう子どもたちにアピールするかということが導入では特に大事です。アピールのしかたによって活動が活発になったり、そうでなかったり、授業の方向が変わったりします。示し方が強ければ活動が画一的になる場合もあるでしょう。したがって、どのような活動ができるか、実際に材料を扱いながら事前に検討しておくことが大事です。

「おもしろいこと、たのしいこと、不思議なこと」が子どもの活動の最も大きな動機になりますから、そのあたりをキーワードに材料の魅力を検討することが大事です。ただし、指導者が考えた活動をそのとおりにさせるのが造形遊びの目的ではないので、予測を立てておき、それなりの準備をしておくことに留めておきます。子どもたちがどんな活動をしてくれるかを期待して、一緒にたのしめるくらいがちょうどよいと思います。

材料のたのしみ方は子どもが一番よく知っています。普段から、子どもがどんなふう材料とかわかり、遊んでいるかを、気をつけて見るようにしたいものです。また美術館などで、近・現代の作家が材料をどう扱っているかを見ると参考になります。

今回の授業「つなげてみると」の材料は、トウモロコシから生まれた地球環境に優しい緩衝材と

して製品化されているものです。形もサイズも繭に似ています。種類にもよりますが、今回使ったものは水に溶け、お互いをくっつけることができます。瞬間的にくっつくので、形をどんどんつくることができます。自然素材なので触った感触も悪くありません。

授業の展開としては、材料を大量に用意して、投げたり、潜ったり、クッションにして寝転がったりすることも考えられましたが、今回はくっつけて形をつくることを活動の主にしました。形をつくると言っても、何かすきなものをつくるという作り方ではなく、くっつけることをたのしんでいたら何か形ができてきたという展開になると造形遊びの目的に合っていると考えました。

そこで導入では、思いつくままにくっつけて、形ができてくるたのしさが伝わるように、実際にいろいろにくっつける方法をやってみせました。子どもたちは形がどんどんできるのを見てとてもやる気を見せていました。

活動の流れは、初めに一人でくっつけてつくる→それを班の人どうしでくっつける→またそれを他の班の人とくっつけるというようにしました。活動がだんだんに広がって、子どもどうしのかかわりも増えていきます。



初めは一人でつくってたのしみ。



班の人どうしで、形を合体する。

2. 場所を生かす

どんな場所で子どもたちに活動させるかを考えておくことも大事です。大きく活動させたい場合は広い校庭や体育館で、そうでなければ教室で、とスペースだけで考えがちですが、場所の形やその雰囲気などもとても大事です。広だけでなく、時には狭い場所や隅、穴のような場所、階段の下、木や草などの自然のある場所など、子どもの視線に立って、たのしい不思議な場所を見つけてみたいものです。

よい場所と材料がうまく組み合わせられれば活動は自然に広がります。今回は何の変哲もないただの図工室ですが、子どもたちは自分たちで材料に合ったスペースを見つけて活動していました。



すきな場所に移動して作り始める。

3. 子どもどうしのかかわり合いを大事にする

造形遊びが他の造形活動と最も違うことに、子どもどうしのかかわり合いがあります。友達を手伝ったり、一緒につくったり、友達のしていることを見て発想を広げたり、褒めたり、意見を言ったり、鑑賞したりということ、特に設定しなくても自然に行われるのが造形遊びです。

最近の子どもたちを教えていて、以前と違うなと感じることに、子どもたちどうしのかかわり合いがあります。例えば、一人の子どもが教えたことと違った活動をしていても、本人がまわりを見て気がついたり、まわりの子どもが本人に教えてあげたりすることができないことが増えてきているように思えます。

普段の図工の授業では一人一人の活動になるので気がつかないことが多いのですが、その点、造形遊びをすると子どもどうしのかかわり合いがよく見えるし、造形遊びが子どものかかわり合いを育てるのに有効だということがわかります。そういう意味でも子どもどうしのかかわり合いを深める造形遊びを大事にしたいです。

ところで、教師が子どもの中に入ってリーダーとして活動するのを時々見かけますが、子どもどうしの試行錯誤を大事にして、教師の出番は控えめにしたいものです。



隣の班とつなげて。

4. 気楽にできる授業をたくさんする

最後にもう一つ、造形遊びの授業の極意をつけ足すとすると、「気楽にできること」であると思います。いくらよい材料でも準備や片づけが大変で、後にごみの山が残るようではレギュラーの授業になることはできません。

「準備、片づけ」と「活発な造形活動」とのバランスのよい授業を見つけて、教師も子どもたちも気楽に造形遊びがもっとたくさんできたらよいと思います。その点、今回の授業は準備も片づけも簡単で、しかも子どもたちは活動をたのしみ、とても満足して帰って行きました。

(いわた まこと)

二つの実践から 「楽しい造形活動(造形遊び)」を考える

兵庫県神戸市立なぎさ小学校 池田 真規子

1. はじめに

「楽しい造形活動(造形遊び)」(以下、「造形遊び」)は、子どもたちにとってわくわくする活動内容であっても、教師にとってはその成果をどこに見出していくのかがかみにくく、どのように実践していくべきか日々悩むところである。第5・6学年まで導入されたにもかかわらず、授業時間数の削減も手伝ってか、残念ながらさまざまな実践が積み重ねられているようには感じられない。

本稿は、筆者が平成19年度1学期に実践した二つの事例を振り返り、「造形遊び」について考えてみるものである。

2. 実践事例①：第4学年「どんどん切って…何が生まれるかな？」

1本の角材を子どもたちに提示して、「今日はこれを切ってみようと思うんだけど。どうやったら切れるかな？」と問いかけ、角材を切るのにどんな道具を使うとよいかを考えることから始めた。

いろいろ出た意見を検討した結果、「両刃のこぎり」が登場。道具の観察(スケッチ)、刃の種類と安全を確認した後、子どもたちは角材を切り始めた。一つ二つ、角材が切れるたびに歓声がわき起こり、どの子も夢中になっていった。さらに切っていくと、「まっすぐ切れない」「切り口がぎざぎざになる」「小さくなると押さえにくい」などの問題も発生。子どもたちの欲求に答える形で「両刃のこぎり」の使い方を伝え、「クランプ」や「万力」などの新たな道具を提示していった。

材料(ベニヤ板)を追加し、さらに切っていく中で、新たな道具(糸のこぎりや電動糸のこぎりなど)も子どもの要求に応じて加えていった。

このような活動を通して各自が道具を適切に選び、工夫して使い、さまざまな形に加工していっ

た。切れた角材やベニヤ板は、さっそく机の上で並べたり積まれたりして、形づくられては崩れ、さらに切ったピースが加わり、また新たな形が生まれていった。そんな中、子どもたちから「〇〇を作りたい」という欲求が生まれてきた。

「つくってみたい」形を実現するために、くぎやかなづちを使って組み立てたいという意見も出た。

そこで、何をつくるかは子どもに任せ、私からは次の三つのことを注文した。

- ・ケチケチ大作戦…もらった材料(角材とベニヤ板)は全部使おう。
- ・ガッチリ大作戦…少々のことではつぶれない頑丈で丈夫なものにしよう。
- ・まとめて大作戦…生み出すものは一つにまとめよう。



子どもたちの思いがたっぷり詰まった作品たち。

これらは子どもの意欲を持続させ、材料とより深くかかわらせるための手立てとして設定した。このような活動を通して一人一人が材料とかかわり、自分らしい形を生み出していった。子どもたちの思考に限りなく寄り添い、費やした14時間。それでも足りなくて、夏休みに入ってから5日間で延べ100人ほどの子どもが図工室にやってきた。



積んでみたら、どうなるのかな？

3. 実践事例②：第5学年 「自然で顔をつくろう」

神戸市では、自然体験学習として5泊6日の自然学校を5年生で実施している。事例②は、この自然学校(兵庫県関宮町養父市ハチ高原)で行ったものである。準備物は軍手のみ。子どもたちは何も知らされずに、宿泊施設の裏手にある雑木林に入った。



力を合わせて。

最初に、目をつぶって、聞こえてくる音に耳を澄ませ、においを感じながら、自然の中に身を置く自分を確認した。そして、ここで見つけた材料と場所を利用して、「顔をつくろう」と提案した。

自然体験を通しての「仲間づくり」がねらいの一つでもあったので、活動は班ごとで行った。

他のスケジュールの関係もあり、顔をつくる活動はほんの30分程度であったが、子どもたちは「顔」に使える材料と場所を吟味し、友だちと協力して雑木林に「顔」を出現させていった。生まれてきた顔の表情は不思議とこやかなものが多く、子どもたちの心を反映しているようだった。



「笑顔いっぱい」笑っている小枝は、簡単には見つからなかった。



「テングサン」笑っている感じにしました。チャームポイントは鼻です。

4. 二つの実践を振り返って

二つの実践のうち、事例①は「つくりたいものをつくる」として、事例②は「造形遊び」としてカリキュラムに位置づけて取り組んだ。

「つくりたいものをつくる」として取り組んだ事例①では、材料(角材とベニヤ板)を切っていく過程において、子どもたちが自然発生的に、切った材料を積んだり並べたりし始めた。これらの活動はまさしく「造形遊び」であり、結果として「つくりたい」という欲求を引き出すものとなった。

つまりこの事例は、「造形遊び」で始まり、三つの注文を出した時点で、「つくりたいものをつくる」にシフトしたと言える。生まれてきた作品は自分らしいアイデアとこだわりが盛り込まれ、一つ一つ味わい深いものとなった。「造形遊び」で始まったからこそ生まれた作品であると考えている。

「造形遊び」として取り組んだ事例②は、活動から造形意欲を引き出した事例①とは違い、最初から「顔をつくろう」と提案した。その結果、子どもたちの活動が「顔」をつくるためのものになってしまい、十分に材料や場所とかかわったものであったとは言えない。時間の制約がなければもっと違うアプローチを考えるべきであったと反省する。しかしながら、これだけの自然の中で活動できるチャンスはそうつくれるものではない。子どもたちにとっては貴重な体験となった。

二つ事例を比較してみると、「つくりたいものをつくる」として取り組んだ事例①の活動内容のほうが、より「造形遊び」のよさを生かした授業であると言えそうである。逆に、事例②のように一見「造形遊び」のようではあるが、子どもたちが材料や場所に十分にかかわらずに終わってしまったものもある。

どのように実践すべきかを悩む「造形遊び」も事例①のような取り組みを意識して取り入れていくことで、自然に展開されていくのかもしれない。事例②も少ないチャンスを生かした点で言えば評価できるのではないかな。二つの事例から学んだことを今後のカリキュラム編成に生かしていきたいと考えているところである。

(いけだ まきこ)

野外造形展とインスタレーション

—風とポリ袋のアート「ふわふわモニュメント」(第1学年)—

愛知県豊橋市立羽田中学校 中神 和也

1. 空間を演出(展示から考える)

「豊橋子ども造形パラダイス」は本年度で51回目を迎え、長い歴史を持つ。市内の子どもたちの作品を公園に一堂に集めた野外展示という位置づけである。しかし、野外展示という意味を考えると、たんに作品を展示するというだけでなく、その展示場所の空間を演出するという意味を持つことにもなる。つまり、「インスタレーション」である。

また、子どもたちにとって「ポリ袋」は、ゴミ袋などの入れ物として見えている。しかし、さまざまな色合いの「ポリ袋」が大量にあったとしたら、そのゴミ袋が大きな袋になったとしたら…。そして、カラフルな色が扇風機でふくれ上がる。そんな不思議なモニュメントが公園の木立の間からふわふわのぞいている。そんな空間づくり。

そのたのしさを仲間と協力してつくり上げる。つくり方は簡単で、ポリ袋を切り開き、はり合わせるだけである。何を公園内に配置するのがおもしろいだろうか、と投げかけた。

2. 準備には、大量の素材

- ・カラーポリ袋17色(赤、橙、桃、黄、黄緑、緑、青、ブルー、水、さくら、白、黒、紫、茶、肌、金、銀)、各100枚

※大量の素材は題材にとっての魅力。

- ・透明梱包用テープ(テープカッター)
- ・産業用扇風機

※複雑な形ほど強力な扇風機が必要である。

簡単な形ならば家庭用でも十分である。

- ・はさみ(よく切れるものがよい)

3. 制作の目的意識を高揚させる

●何をねらってやるの…目的意識

- ・木立の間に作品が並ぶおもしろさ、わくわく感

(屋外作品展示、展示場所の様子)。

- ・作品展に来てくれる人たちに喜んだり驚いたりしてもらう。

この2点は作品づくりにかけるエネルギーになるので大切にしたい。

「この会場に、学級でどんなものをつくってみたいと思ったか」と問いかけ、各自でアイディアスケッチを描く。さらに、スケッチを互いに見合う時間を設け、数点を選ぶ。

ここで意見の交流会を持つ。それぞれよいと思うものを発表し合い、それについての意見交換をする。形の難しさなどの技術的なことはともかく、いかに自分たちの学級にふさわしく、また、森の中に展示するということが、驚いたりおもしろがってもらえるのかということを大切な視点として話し合わせる。

なお、小学校や幼稚園の子どもたちに喜んでもらいたいという視点が入っているので、キャラクターも認めていくことにした。

4. 具体物での話し合い(イメージの具体化)

(1) ポリ袋を使つての配色計画



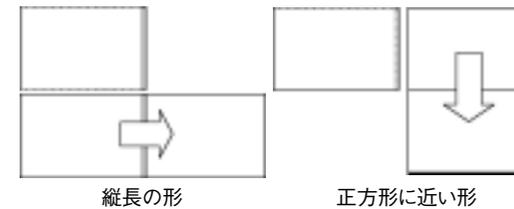
「この色とこの色を組み合わせると、どう?」

ポリ袋をグループの輪に持ち込み、それぞれの部分の色を決定していく。手や足など分かれるものについて、それぞれの分担を決める。

(2) 活動しやすい広い場所の確保

ポリ袋を切り開き、透明梱包テープで接合し、完成のおよその大きさと形に向けて、大きなポリ袋のシートをつくる。大きさを実際に考え、部分とのつながりを考慮するために、柔剣道場など広い場所を確保する。

- ・統一事項…ポリ袋の切り開く向きを決める。



(3) 形を確認しながらつくり、つくり変える

シートが目標の大きさや形になった段階で、袋になるようにはり合わせていく。

また、空気が漏れないようにはり合わせ、送風口として扇風機の羽の大きさの筒を取りつける。そして、扇風機を使って、ふくらませては形を確認し、切ってみたりはり合わせてみたりしながら形を整えていく。やはりここでも、具体物を使つての意見交換が大切である。

さらに切り込みを入れ、別々につくっていた部品をつけたりはったりしていく。この場合も、空気を送り込みながら、送風口から2、3人が中に



「うわーっ! 高い。」

入り、安全面に留意しながら、外側と内側とではり合わせていくとよい。さらに、飾りなどを表面にはりつけていく。

扇風機で風を送るだけで、自分の身長をはるかに超える巨大モニュメントが立ち上がっていく。みんなで話し合いから制作まで協力し合い、でき上がった時の達成感や満足感はとても大きなものになった。

5. 屋外展示(できれば生徒の手で)

展示までは生徒自身でできなかったが、木立の間にさまざまなモニュメントが展示され、風に揺られて、ゆらゆらと動いていた。

また、造形展の当日には、傷んでしまったところを自主的に修理する生徒たちの姿が見られた。



訪れた人々にも好評であった。



小さな子どもたちの人気者。

6. 活動の中で子どもをとらえ、生かす

作品づくりの中で、生徒たちはさまざまな表情を見せる。教師もともに工夫できた喜びを感じ、技術面での相談を受けながら生徒の様子をとらえ続け、次の活動に生かせるように支援する必要がある。もちろん、生徒自身にも振り返りの時間を確保することも大切である。

(なかがみ かずなり)

「紙」を生かして

鹿児島県大島郡大和村立大和中学校 田邊 真理子

1. 授業の考え方

生徒一人一人が「自己表現」できるように、生徒に何らかの刺激を与え、気づかせ、個々の生徒に力をつけさせたいと考え、授業においては次のことに注意しています。

- ・3年間を通して、領域が偏ることなく多くの題材に触れさせながら基礎・基本を押さえさせ、学習体験の積み上げを図る。
 - ・できる限り多くの素材に触れさせる。
 - ・生活に生かす(使う、飾るなど)。
- また、「当たり前のことが丁寧に、確実にできる」ということも大切にしたいと考えています。

2. 「紙」という素材について

これまでの「紙」を素材とした生徒の制作の様子を観察する中で、「紙」の種類豊富さや加工の多様性に、素材としての「紙」の魅力や可能性を再認識させられることが度々ありました。

授業ではさまざまな「紙」を用います。だからこそ絵画でも異なるものを使わせて違いを味わわせたり、それぞれの題材で用いる紙について特性に触れたりしてきています。

身近な存在であり、今後の生活でもつき合っていくであろう「紙」の魅力に触れさせると同時に、種類の豊富な「紙」の中から特性をふまえ、自分のねらいにそった「紙」を選択すれば、個々に応じた表現ができ、生徒の表現に広がりも見られるのではないかと考え、「紙」を生かした「生活の中で使うものをつくる」という題材を設定しました。

3. 授業の実際

(1) 授業の手順

- ①授業で用いる「紙」を可能な限り準備する。
「紙」の下調べをし、次の種類を選ぶ(色は別)。シール画用紙、色画用紙、ケント紙(225kg)、

イラストボード、モデルボード、スチレンボード、マーメイド紙、KCペーパー、彩雲紙、大理石紙、レザック、江戸小紋、岩肌紙(エンボスペーパー=紙に型がついている)、トレーシングペーパー(半透明)、クラシコトレース(トレーシングペーパーに色がついたもの、霜降り状、赤、黄、緑、青)、段ボール、カラー段ボール(白、灰、黒、茶、赤、黄、オレンジ、緑、青、くすんだ緑)など。

②ざら紙などに手を加えさせ、平面から立体に姿を変えさせ、出来上がったものを前に「折る・曲げる・切る・はる・組む・編む」といった加工法を確認させる。

③紙の歴史やその製法、日本独自の「和紙」について理解させる。

④紙の特性(紙肌・厚み・重量・色)を実物に触れて味わわせる。

⑤制作の手順や方法を理解させる。

⑥制作に用いる紙を決定させる。
つくるもののアイデアをまとめさせ、紙を決めさせる。個々のものを確認、記録、集計する。準備してあるもの以外でも可能な限り生徒の希望を取り入れる。不足分の紙を購入する。

⑦制作させる。
生徒自身の立てた見通しにそって、紙や道具を使って制作し、完成させる。

⑧制作の反省(制作意図・選択)と鑑賞をさせる。

(2) 基礎・基本の指導事項についての手だて

①紙の加工法について
生徒の試したもの、用意した例で「折る・曲げる・切る・はる・組む・編む」について示し、まとめる。作品の形状によって、「厚み」は大切な必要条件になることを知らせる。

②ポップアップ例の提示
実物で示す。山折り・谷折りの説明。基本作例、プリント資料の配付。

③接着剤の種類と選択について

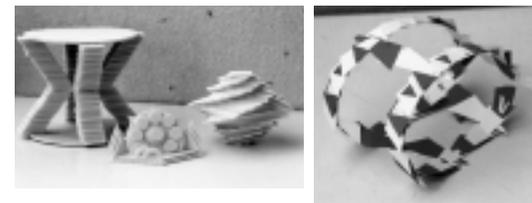
スチレンボードは、発泡スチロール面の接着には発泡スチロール用ボンドを用いることを指示する。

(3) 生徒作品

①絵画的な表現



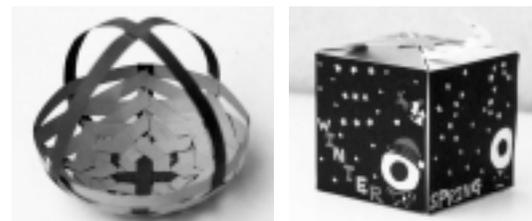
②立体的な作品



③飾ったたのしむ作品



④パッケージ(ものを入れる)



⑤グリーティングカード(人に贈る)



表

内側

4. 制作後の生徒の感想

- ・古来から紙が伝わり、そして活用に応じていろいろな種類ができたということに関心を持ちました。紙とは、自分の想像したものを形として表すことができ、それをつくることによって、「人に訴えること」、「人に関心を持たせること」「人に感動を与えること」など、いろいろな人に感情を持たせることのできるもの、というふうには感じました。
- ・紙というのは、一般的にはぺらぺらなものだと思っていましたが、視野を広げると厚いものや色のついたものなど、素材にいろいろな違いがありました。これをうまく利用すればさまざまな作品ができると思います。
- ・自分の考えで、ただの紙が形を変えて、実用できるものになったりするのだから、紙ってすごい!
- ・曲げたりポップアップしたりするのがたのしかった。いろいろな形にできるのがたのしかった。
- ・思っていたより、いろいろなことができることを知り、びっくりした。案外、つくろうと思えば何でもできそうな気がする。
- ・普段捨てる段ボールも、少し手を加えるだけで、何でもつくれるので、いい気持ちになった。

5. この授業を終えて

「3年間で一番いい作品ができたと思う。紙でもいろんな使い方があって、仕上がりがとてもよかった。紙の種類豊富さにびっくりした。」

これは飾ったたのしむ作品を制作した生徒の感想です。

3年間、この生徒の姿を見てきましたが、本人が言っているように、本題材ではこれまでの学習よりも工夫し、熱心に取り組みました。迷いながらも教科書作品の中からヒントを得て、アルミホイルを芯にして和紙をはって形成し、つくり上げました。

生徒自身が表現を広げ、自分の成長を実感できるような授業を今後も工夫したいと考えています。
※3月までの前任校・鹿児島県日置市立伊集院北中学校での実践

(たべ まりこ)

子どもの椅子

FROM

北海道教育大学附属札幌小学校
堀口 基一



私は図画工作科の時間が大すぎです。子どもたちの笑顔と真剣なまなざしをたくさん感じ、見つめることができるからです。何かをかいたりつくったりする図画工作科の時間は、まさに子どもたちとのステキな時間の共有なのです。一生懸命に表現活動に没頭する子どもたちにそっと耳を傾け、その様子に注目すると、いろいろなドキドキやわ

くわく、チャレンジに、ちょっぴりの方向転換などが見え隠れしてきます。

6年生のある授業でのことです。木の枝を使った活動をしている時、ある男の子(N君としましょう)がぼたぼたと汗をたらしながら一生懸命枝と枝を縛りつけようとしています。階段の手すりほどもあるその枝を、なかなかうまく縛りつけることが

できない様子です。私は一瞬「手を貸してあげようかな」と思ったのですが、汗を光らせながら真剣に表現に向かう表情に圧倒されたこともあり、しばし見守ることにしたのです。

麻ひもを幾重にも繰り返して2本の枝にまわし、力をこめてギリギリと縛り上げていきます。しかし、それでも枝はグラグラしている様子です。そのうちN君はのこぎりを持ち出し、あることを始めました。なんと麻ひもを巻きつけている部分の枝に切り込みを入れているのです。無言かつ真剣な表情のN君。私は初め「ははぁん、あきらめて切ってしまうんだなぁ」と思ったのですが、全くその逆だった

わけです。

切り込みを数箇所につけると、その切り込みに麻ひもをめり込ませるようにして縛り始めました。ギリギリとひもの縛る音がしています。時々、ひもに擦れる手を痛がるように、空中で振りながら赤くなった手のひらを見つめていたりします。でも、あきらめずに続けています。しばらくすると「ふうっ」と大きく息をして、つくりつつある作品を少しほっとした表情で眺めています。私も、「よくやったなぁ、なかなか粘り強いぞ」などとにんまりしていました。

ところが、なんとN君は、その麻ひもをチョキチョキ切り始めたのです。さすがの私も「あ

れあれ、どうしたのかな」と言葉も選ばず、反射的にN君に尋ねてしまいました。するとN君は何もないような言葉で「いいことを思いついたので、そっちにします」と言うのです。私は内心「こんなにいい方法を思いつき、粘り強く取り組んだのにどうするのか」と、少々もったいない感覚すら覚えました。しかしN君は全く迷う余地もなく、するすると糸をほどき、のこぎりを手に取ったのです。そして、一方の枝の端の部分に斜めに切り始めました。もう一方の枝は、側面を「く」の形に切り込んでいきます。

N君が見つけた方法とは、枝と枝を直接組み合わせで固定さ

せる方法だったのです。N君によると、凸凹に削った枝どうしを互いに組み合わせ、縛りつけることで、より美しく、整った形をめざしたというのです。

このようなN君との時間は、みるみる過ぎていくステキな時間でした。まるで言葉を使わずとも会話しているような、私とN君、そして材料までも仲間にして話しているような、そんな「ステキな時間」がそこにはあります。便利で速くてモノにあふれるこの時代、図画工作科で味わうことのできる「ちょっぴり不便でゆっくりでモノをつくり出す」時間を大切にしていきたいと改めて思うのです。

(ほりぐち きいち)

図工室

美術室

1枚の絵の向こうに

高橋 幸代(岩手県九戸郡洋野町立種市小学校)

海が見える学校に赴任した。春はフノリ、夏はウニやホヤや昆布を採るが、漁業権を持っている人しか海には入れない。浜作業は限られた時間に行われるため、子どもが手伝うことができない。海の町の子どもたちだが、「海の子」ではなかった。

この子たちを「海の子」にしたいという強い思いがわいてきた。漁協にお願いし、磯の生き物との触れ合いと浜作業体験を計画した。磯遊びは実現できたが、早春の作業、潜って採る漁潮や天候の影響など、子どもたちを浜作業にかかわらせることは容易ではなかった。

ある日、浜作業をしていると聞いて漁港に出かけた。船から大きな網でウニがあがると「わ

あ、すごい」「きれいな色」「動いているぞ」。ウニをむく見事な手さばきに「速いな」「やさしく水に入れている」「細かい作業だ」。子どもたちの心の中に感動の波が打ち寄せる。

その思いを、ウニを持つ手の表情、作業をする目線に気をつけてスケッチしていく。ウニ採りの場所は深く近づけないので、写真に撮っていただいた。学校に戻り、写真からも海で働いている人の思いを新たに感じることができた。

自分の心が揺さぶられた新鮮な感動や驚きを1枚の画用紙に

表現していく。スケッチをもとにトリミングしたり、かき足したり、強調したりして自分の思いを鮮明にしていく。ウニやホヤをじっくり見て、混色や重色など彩色を工夫する。

1年生の時の海、2年生の時の海…と、卒業までに6枚の海の絵をかくことにより、心の中にふるさとの海が広がり、「海の子」として成長してきている。

(たかはし さちよ)



「篆刻」の指導の中から

箕輪 利和(茨城県稲敷市立江戸崎中学校)

本校では、彫刻の授業として「篆刻」を行っている。縦横3cm、高さ7cm程度の高麗石を使って、自分の名前やデザインを彫刻させる。導入時には、自分の名前を篆書体で書かせたり、印材の側面のデザインを考えさせたりして、「絵画・彫刻」や「デザイン・工芸」の活動要素を踏まえつつ展開していている。

自分の名前を篆書体で書くという活動は生徒にとって初めての経験であり、取り組み方も違って来る。特に篆書体の「小篆」は柔の中に剛があり、剛の中に

柔があるという微妙なバランスの上に成り立っているという点で生徒にも受けがよかった。

印材の側面にも彫刻を彫らせているが、中には現代彫刻家の抽象作品と見違えるばかりの作品と出会うこともある。

手を真っ白にさせながら篆刻刀を握り、真剣に彫っている生徒の姿を見ると、ラスコーやアルタミラ洞窟壁画をかいていた旧石器人の美術の制作態度と同質のものを感じてくる。

そこには、うまいとかへたとかの表面上の評価はなく、何か人間がこの世界で生きていく上

での重要な営みの一端を見せてくれているように感じられた。つくり出そうとする創造の強いエネルギーを感じる。

そして、このエネルギーはどこから来るのかと思えば、どこか別の所からやってくるのではなく、すでに生徒自身の中にあり、先史時代の人々から脈々と受け継がれてきているものではなかったのかと思えた。

現在、美術教育では、生徒の実体験不足などが課題として取り上げられることが多いが、生徒の中の強い創造のエネルギーを大切に、今後も指導に当たっていききたいと思う。

(みのわ としかつ)

「画用紙をかくそう」

—環境を生かした造形遊び—

山梨県甲府市立大里小学校 大村 一也

1. はじめに

造形遊びは、「何を指導してよいかわからない。」「造形遊びは準備や後片づけが大変だ。」などの声をよく聞く。そこで、できるだけ手軽にできて、子どもたちが熱中して行う造形遊びがないかと考えた題材が「画用紙をかくそう」である。

2. 題材について

一般的に画用紙と言えば、絵の具やパスをもとにして、絵や模様などをかくためのものである。本題材では、このような画用紙としての機能を捨て去り、新たな「かくす」ものとしてみようと考えた。

本題材での「かくす」とは、白い画用紙を床や壁に置くことから始まる。体をかくす動物のように木の幹や葉っぱの上を選ぶ子、はっきりとした色がかくれているポスターや絵の上を選ぶ子など、子どもたちはいろいろなかくし場所を見つけることができるであろう。また、「ここは模様がたくさんあるからかくれやすい場所なんだ。」とか、「意外とはっきりした色と形があるほうがかくれやすいかもしれない。」など、いろいろなかくし場所のよさにも気がつくであろう。

画用紙を置いただけではずいぶんと目立ってしまう。そこで、画用紙をかくす方法として色をまわりと同じにする、まわりにある線や模様を続けたいという気持ちが自然と起こってくる。その中で、一人一人が自分のかくし方を見つけていくことになる。例えば、まわりの壁の色をつくり出す子どももいるだろう。しかし、一度つくっても、合わせてみると違っていることもある。そこで、ほかの色を混ぜ合わせて何とか少しでも近づけようとする。こうしてつくり出した色を全面にぬりつけたり、一部分にぬったりすることで、子どもたちの活動は活発になるだろう。

さらに、自分が選んだ場所で画用紙に絵の具で

色をぬっていくと、友だちに見てもらってどんなふうに見えるか聞いたり、ちょっと離れて遠くからその場所の色や形、模様をもう一度見直したりしていくことだろう。

活動の後は、できるだけみんなで活動の成果を見せ合えるようにしたい。かくした画用紙をみんなで探し、感想を発表し合うことでお互いのかくし方のよさや違いを味わわせていきたい。

造形遊びでは、評価が問題にされやすい。子どもたちの活動が広い場所に散ってしまって一人一人が何をしたのかわからない。または、教師が子どもたちの行為(活動)が持つ意味や価値を見出すことができないなどが主な理由である。

そこで、本題材では今まで取り組んできているポートフォリオを活用し、自己評価・相互評価、子どもたちの活動の様子や作品などから子どもたちの思いを読み取っていきたい。

3. 授業の展開 (第6学年、3時間)

①体の色や形を変えて、人間の目を惑わしている動物は何だろう。

・カメレオン ・たこ ・ななふし ・蛾

②画用紙をかくす場所を見つけて、かくしてみよう。

●子どもたちの代表的な作品から



「ぞうきん」

廊下に置いてあるぞうきん掛けのそばでかいている子は、画用紙をくしゃくしゃにして汚れをつけていた。教室から洗濯ばさみまで持ってきて、本物のぞうきんの中でかくそうとしていた。まるで見る人を騙そうとするかのようなたのしい作品になった。



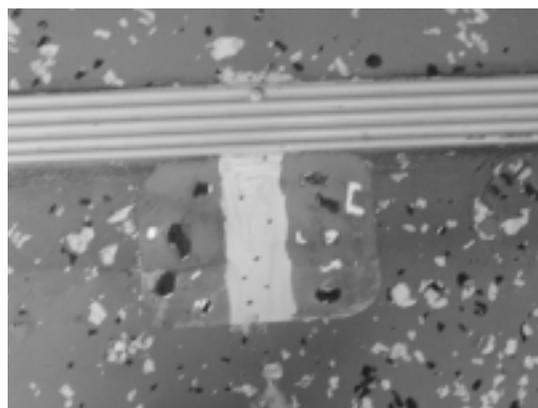
「ガラスの表示物」

窓ガラスにはられた表示物に画用紙を当て、表示物の輪郭を取って緻密にかこうとしている。まるで、写真に撮ったような作品が完成した。



「下駄箱の上履き」

下駄箱に上履きが入っているように立体的にかこうとしている。かくすというより、こんなふうに見えるよ、というメッセージを感じる。



「床」

汚れているところをどうかけばいいだろう。難しいな。など言いながら、なんとか実物の色合いを出そうと工夫しながらできた作品。

③かくした画用紙をみんなでさがそう。

*相互評価のカードに記入しながら鑑賞する。
・床の模様や汚れが本物みたいだね。
・ぞうきんの中にうまくかくしてあるね。

④学習活動を振り返ろう。

*自己評価カードに記入しながら振り返る。
・満足できるような作品になった。
・かくす場所をうまく使って、画用紙をかくすことができた。

4. 実践を終えて

(1) 題材の設定について

子どもたちは画用紙をかくすために、教師の細かい指示などなくても自分なりの工夫を続け、最後まで意欲的に活動することができた。

(2) 評価の工夫

ポートフォリオにより子どもたちがいつでも自分の表現活動を振り返ることができるようにしている。自己評価カードによって自らの活動を振り返ることにより、子どもたちは自分の作品のよさを感じたり、次の表現活動に向けての課題を見つめたりすることができるようになってきている。

しかし、子どもによっては、自分の表現活動の振り返りをうまく文章に表せない子もいる。また、その逆もある。授業中の子どもたちの表現活動を詳しく見ていくことの大切さを改めて感じた。

(3) 鑑賞活動について

本題材では、鑑賞活動に「かくした画用紙をさがす」という意味づけをした。そのことによって子どもたちは自然に鑑賞活動に入っていくことができた。

また、画用紙をさがしながら鑑賞することによって、どんな工夫がされているかを考えながら鑑賞(さがす)することができた。

(おおむら かずや)

「ご来室の方へ」 —ドアノブ・プレートの制作—

石川県立金沢錦丘中学校 小西 裕一

1. はじめに

授業時数削減の影響により、一つの題材にあまり長い時間をかけられなくなるとともに、題材の種類を多くすることが難しくなった。そこで内容にも工夫が必要となってきたのだが、本題材は視覚伝達というデザインの要素と、木彫という工芸の要素を複合した題材として設定した。

ホテルに宿泊すると、就寝中やベッドメイキングを知らせるのにドアノブに付けるプレートがある。普通は文字だけで表されているが、自分にかかわる部屋にかけるとしたら、どんなたのしいプレートをすることができるだろうか、というのが表現への出発点である。

2. 造形表現上のポイント

(1) 視覚による伝達表現

表裏でデザインが変わること＝リバーシブル・デザインである。例えば、IN：OUT、ON：OFF、在室：外出中など、プレートを掛け替えることで来訪者に情報を伝える。ここで留意するのは、誰に(知らせる対象)、何を(知らせる内容)、どのように(表現方法)知らせるのかである。

また、文字の意味で表すだけではなく、色や形を工夫したり、絵を入れたりすることで見た人をたのしませるものであることが大切である。



アイディアスケッチ

下書き図

見た目の美しさ、ユーモアを感じさせるものや、自分の部屋であることを強調するものであってもよいこと、特にリバーシブルであることを利用して、絵や配色が変化するなどの工夫があるとよいことにした。

(2) 木彫による効果

浮き彫りなどの木彫技法を使って半立体的な効果を出せること。小学校の図画工作でも彫刻刀を使うが、主に木版画において使用されることが多い。ここでは、彫りそのものの美しさと技法上の効果について経験させたいと考えた。

3. 制作の中で

(1) 素材について

材料となる板は縦20cm、横10cm、厚さ1cmで、穴の大きさが直径6cm。このサイズは実際のドアノブから割り出した。これを基本として、必要に応じて電動糸のこぎりで角を切断するなどの加工をしてもよいことにした。

(2) 文字について

字数が多いと画面が煩雑になり、インパクトが弱くなるおそれがあるのと、レイアウトに制限が多くなることから、どんな言葉を入れるかよく考えるように指導した。

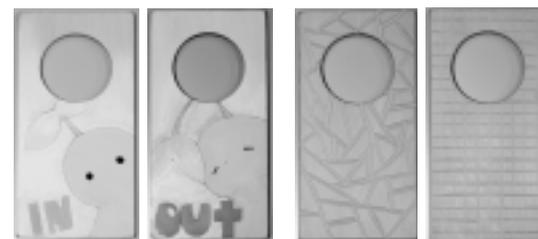
特に表裏で伝える内容を変えることから、言葉がなるべく対になるようにとの条件を設けた。生徒の反応を見ると、自分の部屋のドアに掛けるという者が圧倒的に多く、「勉強中：自由時間」「睡眠中：外出中」「IN DOOR：OUT DOOR」などがよく見られた。

また、彫りを施す際に、ある程度の太さが必要であることも考慮させた。

(3) 木彫表現について

木彫技法の基本技法として片切彫り、浮き彫り、かまぼこ彫り、葉研彫り、菱合彫りなどを指導し

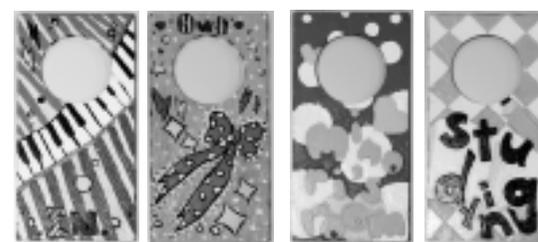
た。その中でデザインを考える際に必要な技法を選択できるようにした。特に浮き彫りとかまぼこ彫りは、半立体表現を行う上で、彩色と相まって効果が大きいことから、彫る部分と残す部分をどうするかが重要となる。意匠については、ほとんどの生徒は具象による表現を選んだが、中には線彫りによる抽象の表現を選んだ生徒もいた。



(4) 彩色について

描画材料はアクリルガッシュを使用した。耐水性・耐久性が高く、通常の水性絵の具では手で触っているだけでも色落ちするため、ニスによる保護等が必要であるから、アクリルガッシュが本題材には適した描画材料と言えるだろう。

また、アクリルガッシュは不透明性があり、被膜性が強いことから、修正や重ね塗りも容易である。発色の鮮やかさと相まって、彩色の苦手な生徒の失敗へのおそれを軽減するだけでなく、仕上がりのよさが完成作品への満足感を高めることになった。



(5) 仕上げについて

仕上げは、以下の中から選択させることにした。
①彩色艶消し仕上げ…サンドペーパー240番で軽く下地処理をして彩色し、完成させる。
②彩色光沢仕上げ…①の後、ニスを二度塗りして完成。その際、一度に厚く塗るとムラができたりに流れたりすることがあるので、薄めに1回目を塗って、乾いた後、やはり薄く2回目を塗るのが肝心である。

③ワックス仕上げ…サンドペーパー120番か240番で磨いた後、320番で光沢が出るまで磨き込み、最後はワックスと布で仕上げる。本来は木目を生かす技法であるため、材料を選定する際に、木目がきれいな木を選んでもよい。

4. おわりに

本題材を行う際に心配だったのは、扉が開き戸ではなく、和室に見られる引き戸のようにドアノブ自体がない場合のことである。幸い、事前のリサーチでは家の中にまったくドアノブがないという生徒は極めて少なく、またノブがなくても、フックになるものを取りつければ、それに引っかけることで解決することができた。

彫刻刀を使う題材を行っていて、昨今、強く感じるのは、刃物の扱いに慣れていない生徒が非常に多いことである。小学校では木版画で初めて彫刻刀に触れることが多く、その際、刃の種類や基本的な使い方を習う。実際に彫る体験を通じて、時には失敗しながら、正しい持ち方や刃の当て方を体得していくのだから、中学校で再びやらせると、実に危なっかしい操作をする者が多い。

加えて、小学校時代から持ち越してきている彫刻刀そのものが刃こぼれしていたり、切れ味が鈍っていたりすることがよくあり、余分な力が入るため、「切れない刃物ほど(手を)切りやすい」の道理である。

そのような彫刻刀は、見つけ次第、彫刻刀研ぎ機で研いでやる。生徒は生まれ変わったかのような刃に驚嘆し、軽くスムーズになった彫り味に大変喜ぶ。それがまた制作への意欲につながっていくのであるが、現状では教師の中に刃を研げる者が少ないということが残念でならない。

美術という教科の特殊性を鑑みると、ジャンルの幅広さから、すべての領域を網羅することは難しいものの、題材の設定において教師の裁量が生かしやすい教科であるとも言える。新しい内容を取り入れたり、運用を見直したりして、題材の精選を進めるとともに、自己研鑽を続けることによって教師自身が扱える範囲を広げようとするのが大切であるように思う。

(こにし ゆういち)

彫刻ロードからの旅立ち —見て、触って、感じて—

主体的なかかわりを大切にした鑑賞学習(第5学年)

鳥取県米子市立就将小学校 大西 浩治

1. はじめに

昨年の七夕の日、図画工作で鑑賞領域の公開授業をすることになった。そこで、今回は「再構成」という手法を取り入れ、地域素材を生かした鑑賞の学習にチャレンジした。

2. 地域素材の活用

1988年に始まり、国内外の彫刻家を招いて隔年で開催され、昨年の第10回をもって最後となった「米子彫刻シンポジウム」。このシンポジウムで制作された作品が、校区にある米子市文化ホールから湊山公園までの新加茂川沿いの「彫刻ロード」と称される遊歩道約5kmにわたって設置されている。この野外美術館とも言える彫刻ロードに立ち並ぶ彫刻作品との出会いをきっかけに学習を展開した。



彫刻ロード

3. 実践事例「彫刻ロードからの旅立ち」

(1) 第1次(60分)

- ①彫刻ロードを歩き、彫刻作品を見たり触ったりしながら、石の色や形、質感などを味わう。
- ②自分の気に入った彫刻作品を、自分の好きな角度からデジタルカメラで撮影する。



「月に向かって進め'96」

(2) 第2次(60分)

- ①プリントアウトした彫刻作品の写真をはさみで切り取り、のりで画用紙にはる。
- ②鑑賞によって得た思いを大切に、その作品をどこに置きたいか、どう見立てたか、コピーで背景をかき加え、作品に仕上げ、題名をつける。
- ③再構成した作品を小グループや学級全体で発表し、意見を交流し合う。



(3) この学習で大切にしたこと

- ①彫刻作品をもとに再構成することで、作者の思いに触れさせる。特に、「この色、この形、この質感、この角度」といったこだわりを大切にすること。
- ②児童のつぶやきを大切に、評価を加える。
- ③人によってももの見方や感じ方が違うことに気づかせ、互いの作品のよさや思いを共有する。

4. 学習を終えて(児童Aの感想から)

ぼくは、たまに彫刻ロードを通ることがあるけれど、意識して彫刻作品を見たことはありませんでした。でも今回の学習で、へこんでいる所や出っ張っている所、みがいてある所やざらざらしている所、うすい色やこい色など、近くでよく見るとちがいがよくわかりました。ふつうの石を、みんなの心をなごませることができそうな彫刻作品、芸術作品に変えられるなんてすごいと思いました。ぼくは、「月に向かって進め'96」という作

品を選んだけど、ほかにもすばらしい作品ばかりで、またいろいろな彫刻作品を見たいと思いました。



「止まらぬ時の船」(児童Aの作品)

5. おわりに

地域素材である彫刻作品と出会い、見て、触って、感じたことをもとに、児童一人一人が自分の思いを広げ、再構成することができた。また、互いの作品を鑑賞することで、主体的に作品や友だちにかかわることもできた。学習後、地域の彫刻作品への興味や関心が高まり、実際に彫刻シンポジウムに参加し、自ら石の彫刻にチャレンジする児童も見られた。さらには、そこで知り合った彫刻家と親しくなり、手紙のやり取りをする児童さえもあった。児童の手によって再構成された作品は、一人一人の夢を乗せ、彫刻ロードから旅立った。(おおにし こうじ)

造形ピックアップ

感性を培い、創造に喜ぶ子どもの育成をめざして

— 西海市・西彼杵郡教育研究会 図工・美術部会 —

長崎県西彼杵郡時津町立時津北小学校 浦田 成人

◆「教育研究会」とは

この会は大島町・大瀬戸町・西海町・崎戸町・西彼町の5町からなる西海市と、長与町・時津町の2町からなる西彼杵郡の小・中学校の先生方で構成された教育研究団体です。

平成19年度の図工・美術部会には、小学校26名、中学校9名、計35名の部員がおります。普段の研修は3支部に分かれ、その支部ごとに活動することが多いのですが、より研修を深めるために全体でも行っています。

◆子どもたちのために、自分自身のために

子どもたちのために、そして教師としての技量をより高めるために、夏季休業を利用して実技研修会を行っています。講師は外部からお招きすることもありますが、部員の中で講師をお願いして行っています。内容は、全員が同じ実技を行うのではなく、絵画・工作・彫刻などいろいろと経験できるように、複数の講師によって研修を深めています。この研修会は、部員のみならず、受講を希望する方はどなたでも参加できるようになっています。

また、図工科の授業、美術科の授業をお互いに公開して研究協議を行い、よりよい授業の在り方

についても研究を深めています。子どもたちが自分の思いを生き生きと表現できるような授業づくりに努めています。



◆子どもたちの作品を見て

毎年行われる「子ども県展」のブロック審査も教育研究会の部員で行います。たくさんの中からの入選作を選出するのですから、「審査は難しい。」という声も聞かれるのですが、審査の視点を共通理解した上で行っています。この審査会を通して、子どもたちの作品を見る力を養うとともに、今後の指導をどのように行っていけばよいかを考えることができるようになります。子どもたちの作品から多くのことを学び取ることができる、とてもよい機会です。(うらた しげと)